

論文

同郷団体活動の変容と文化的表象 — 神戸における奄美出身者の事例をもとに —

中西 雄二*

1. はじめに

(1) 問題の所在

20世紀半ばまで、近代化の進行によって国民国家内部の差異が次第に消えていき、やがてエスニシティは消滅するという同化理論（例えば、Park 1923）は近代化理論の主要な位置を占めていた。ところが、その理論的なヴィジョンに反し、1960年代以降のアメリカ合衆国における公民権運動を典型として、むしろエスニック集団が多数派社会との差異や自集団のアイデンティティを前面に押し出す形で組織されたり、社会運動を展開したりする事例が顕在化した（グレーバー1986；山中1998）。

あわせて、メルッチ（1997）が提唱した「新しい社会運動」が示すようなアイデンティティの表明自体が運動イデオロギーの中核となり、運動そのものがアイデンティフィケーションとなるようなエスニック集団の活動も顕著に認められるようになった。本稿では、こうしたエスニック集団研究や移民研究の知見を、地縁・血縁に基づいて形成された近代日本における国内移民の団体である同郷団体の事例に援用する。そして、人々によってアイデンティティの基盤となる場所として認識されるホームのあり方に焦点を当てながら、同郷団体の集合的なアイデンティフィケーションに関する議論を進めていきたい。

地理学におけるホームをめぐる移動論的議論をみると、神田（2004）が述べるように、必ずしも物理的に近接したもののみ限定されるわけではない。例えば、ホームとして認識される「郷土」や「ふるさと」は出身地からの移動、さらにその結果としての物理的な距離を前提とすることによって、初めて表象されうるものであるといえる。そして、その表象された出身地というホームのシンボリックな「文化」

* 東海大学文学部文明学科

が移民集団の社会的、政治的要求を行なう運動の動員手段として用いられたり、「文化的抵抗」の中核として機能する状況が生じる例が示されてきた（例えば、水内 2001 や Blunt 2007）。このようなアイデンティフィケーションの文化的過程は、マイノリティの多数派社会との関係性に影響を受けながら、出身地を表象するシンボリックな文化を再構築していく過程でもある。そこでは様々な文化的諸要素の断片を組み合わせて構築され、提示されていくものであり、集合的アイデンティティの中核として継承されていくシンボル性こそが重要となる（椿 1998）。

杉浦（1998）はアメリカ合衆国西部の日系人集住地区の事例をもとに、マイノリティ集団が他者化された経験、さらには失われた結束や集住状態の希薄化などから受ける心理的ストレスへの対応として、シンボリックな景観やモニュメントが創造していく状況を空間的ストレスシンボル過程として分析した。このようなエスニック集団の集合的アイデンティティの表象された事物や文化的行動を、Stern・Cicala（1991）は「エスニック・シンボル」と定義し、こうした表象を通じた諸実践は集団の置かれている状況に対する極めて動態的な適応の手段の 1 つであると論じる。そこで本研究においても、同郷者間の紐帶維持やアイデンティフィケーションにおける文化的実践に注目し、近年の同郷団体の文化活動の特徴と変容過程から、奄美出身者に関わる集合的アイデンティティの表象の様相を探っていく。

（2）他者化の経験と奄美出身者の組織化

中西（2007）が明らかにしたように、奄美出身者の組織化には「本土」の移住地においてホスト社会から国民国家・日本の境界地出身者として受けた文化的、社会的差異を背景とする他者化の経験が、極めて重大な外的要因として作用してきた。戦前期に活動した奄美出身者の同郷団体は同郷者間の相互扶助を主要な活動目的の 1 つとして、同郷であることに基づき組織化した。にもかかわらず、同時に様々な偏見を克服するため、多数派社会への同化を志向する労働力としての規律化や「修養」を目指す両義的な活動を展開したのである。ただし、相互扶助や防衛的な集住、そして組織化といった政治的要素のみならず、同郷団体行事で奄美的民謡や舞踊が演じられるなど、親睦活動を旨とするシンボリックな文化的要素をあわせ持つという両義性も、当時の奄美出身者の同郷団体の特徴であった。

戦後においても奄美関連の同郷団体が抱える「同化」志向は継続する。これは戦前期に同郷団体の中核を担った人々が、引き続いて戦後も同郷団体の活動再開や運営に関わったことにも起因するが、加えて「復帰運動」が与えた影響も極めて大き

い。奄美の「復帰運動」においては、奄美や奄美出身者を、日本「本土」や鹿児島県、それに日本人と同一化を強調する言説を用いて奄美の「本土復帰」を主張するとともに、「琉球」や「沖縄」との差異化を強調することでアメリカ軍政下からの離脱を訴えるという特徴があった（中西 2016）。

この「復帰運動」展開期は、奄美関連の同郷団体の再生期であると同時に、「本土」への同化志向の継続と「琉球」に対する否定的な認識という、対他的なアイデンティフィケーションが顕在化した時期でもあった。こうした「下からの」多数派社会への同化、または国民国家の中核への同一化という事例は、出身地の行政分離や「非日本人」に範疇化され得る恐れを経験した境界地出身者としての特徴であり、同化を余儀なくされる構造的な周縁的な不安定な地位を物語っている。

小林（1994）は参与観察をもとに、第2次世界大戦後における奄美の同郷団体活動を相互扶助活動ではなく、「ふるさと」へのノスタルジーに基づく親睦活動にシフトしたと論じた。では、前述の問題設定を踏まえて、いかなる形で奄美出身者は自らのホームを表象しているのか。そして、その同郷団体の実践が意味するところは何なのか、本稿では第2次世界大戦後以降の同郷団体の活動内容を明らかにしていくことによって分析していく。

2. 同郷団体の構成

神戸とその周辺に在住する奄美出身者を包含する同郷団体として、神戸奄美会がある¹。同会の会則には、「本会は会員相互の親睦・融和を図るとともに郷土の発展に寄与することを目的とする。」（神戸奄美会 1990）と明記されている。だが、主だった親睦活動は年に1回開かれる定期総会兼演芸大会と奄美の特産品を扱った物産展にほぼ限られ、神戸奄美会は神戸を拠点とする同郷団体の連合体としての性格が強い。従って、神戸奄美会が直接会員から年会費を集めることはなく、会の運営は定期総会や役員の懇親会等の会費と寄付による収入で賄われている。

加えて、2年を1期とする神戸奄美会会長は喜界島・大島本島、徳之島、沖永良部島・与論島の3地区ごとの輪番制で選出されていて、その他の役員は副会長を除いて、ほとんどが会長の任命によって決められている。また、会長をはじめ、神戸奄美会の役員には構成団体の役員経験者が就くことが大半である。同様に、神戸奄美会の構成団体の中にも神戸徳之島連合会や神戸沖洲会など、集落や小学校校区単位の同郷団体によって設立された島単位の連合組織が含まれている（表1）。

表1 神戸奄美会の構成団体

名称	出身島	出身地域
大島本島会	大島本島	大島本島全1市2町2村
神戸徳之島連合会	徳之島	徳之島全3町
神戸沖洲会	沖永良部島	沖永良部島全2町

資料:神戸奄美会(2000)と筆者による聞き取り調査をもとに作成。

神戸沖洲会は傘下に9団体の小学校校区単位の会があり、さらにその下部組織として支部と呼ばれる38団体の集落単位の同郷団体が存在する（表2）。これらの団体で沖永良部島のほぼ全ての集落を網羅しており、各団体は年に7回程度行なわれる支部長会において、相互に代表者間の連絡を定期的に行なっている。2006年3月の時点で神戸沖洲会の会員は2,786世帯を数え（神戸沖洲会記念誌編集委員会2006）、神戸に拠点を置く同郷団体としては最も規模が大きい。

一方、神戸徳之島連合会は1974年に神戸徳洲会として設立され、当初は徳之島の小学校校区や集落を単位とする12の支部を置いていた（表3）。その後、同名の医療法人との混同を避けるために神戸徳之島三町連合に改称された。だが、1980年頃から、会員の減少によって連合会への役員派遣が困難になる団体も現れ出し、現在では天城町出身者の支部は存在せず、会の名称も神戸徳之島連合会に改められている（表4）。会長の選任は神戸奄美会と同じく地区ごとの輪番制で、現在は事実上、神戸亀津会、神戸神校会、神戸伊仙町会、京阪神花徳会の4団体から選任されている状況である。

なお、神戸奄美会の構成団体には喜界島出身者と与論島出身者の団体が存在しない。これは神戸在住の両島出身者が少数であることに起因する。だが、喜界島出身者に関して言えば、2000年に同島出身者から初めて神戸奄美会会長が選任されているほか、神戸奄美会定期総会に付随して行なわれた演芸プログラムでも、喜界島出身者の出演する演目があることが示す通り、神戸奄美会への関わり合いは強くみられる。これら神戸在住の喜界島出身者の中には、主に大阪や尼崎で活動していて関西奄美会に加盟している関西喜界町郷友会に入会しているものがあり、同時に神戸奄美会の活動にも関与している例が少なくないのである。

同様の傾向は大島本島出身者にもみられ、京阪神用安会以外に神戸で積極的な活動を行なっている団体は認められないが²、関西奄美会の構成団体に入会している神戸在住者が神戸奄美会の役員に就くことが多い³。但し、与論島出身者の神戸奄美会への参加はほとんどなく、近年は同島出身者の神戸奄美会役員は皆無である。

表2 神戸沖洲会の構成団体

校区会名	出身校区	支部名	出身集落
神戸和泊校友会	和泊小学校(和泊町)	神戸南洲会	和泊・手々知名 上手々知名・伊延
		神和会	和
		阪神地区喜美留会	喜美留
		うにごの会	出花
		神戸愛湾会	畦布
神戸国頭校区会	国頭小学校(和泊町)	国頭郷友会	国頭
		西原友の会	西原
神戸一流会	大城小学校(和泊町)	根折親愛会	根折
		神戸玉友会	玉城
		大城神郷会	大城
		皆川親和会	皆川
		古里親友会	古里
神戸越南会	内城小学校(和泊町)	内城郷心会	内城
		瀬名親進会	瀬名
		永嶺神永会	永嶺
		谷山親交会	谷山
		後蘭後神会	後蘭
神戸白浜会	知名小学校(知名町)	関西知友会	知名
		神戸瀬利覚会	瀬利覚
		阪神黒貧共助会	黒貧
		「旅の屋子母びど」の集い	屋子母
神戸八光会	下平川小学校(知名町)	神戸芦清良同志会	芦清良
		神戸赤嶺会	赤嶺
		神戸屋者共助会	屋者
		神戸久志検会	久志検
		神戸余多会	余多
		神戸上平川同志会	上平川
		神戸竿津会	竿津
		神戸下平川神友会	下平川
神戸昇竜会	住吉小学校(知名町)	大津勘親睦会	大津勘
		神戸徳時会	徳時
		神戸住吉会	住吉
		正名興和会	正名
神戸田皆親友会 *1	田皆小学校(知名町)	神戸田皆親友会	田皆
神戸西目会 *2	上城小学校(知名町)	上城支部	上城
		下城支部	下城
		新城支部	新城

*1 田皆校区は1集落で校区を構成している。

*2 上城校区は構成する3つの出身集落で合同した支部活動を行っている。

資料:神戸沖洲会創立90周年記念誌編集委員会(2016)と筆者による聞き取り調査をもとに作成。

表3 神戸徳洲会の支部（1976年11月現在）

名称	出身町	出身地域
亀津会支部	徳之島町 (旧亀津町)	亀津(字)
龟徳会支部	徳之島町 (旧亀津町)	龟徳(字)
神校会支部	徳之島町 (旧亀津町)	神之嶺小学校校区
母間会支部	徳之島町 (旧東天城町)	母間(字)
花徳会支部	徳之島町 (旧東天城町)	花徳(字)
山和会支部	徳之島町 (旧東天城町)	山(字)
金見会支部	徳之島町 (旧東天城町)	金見(字)
天城会支部	天城町	天城町
面縄会支部	伊仙町	面縄小学校校区
目手久会支部	伊仙町	目手久(字)
喜念会支部	伊仙町	喜念小学校校区
尾母会支部	伊仙町	尾母(字)

資料：神戸徳洲会（1976）。

表4 神戸徳之島連合会の構成団体（2018年現在）

名称	出身町	出身集落
神戸亀津会	徳之島町 (旧亀津町)	亀津
神戸神校会	徳之島町 (旧亀津町)	徳和瀬・諸田・神之嶺 宝島・伊宝・佐渡・下久志
京阪神花徳会	徳之島町 (旧東天城町)	花徳
神戸山和会	徳之島町 (旧東天城町)	山
神戸伊仙町会	伊仙町	全集落

資料：筆者による聞き取り調査をもとに作成。

3. 同郷団体活動の変容

（1）政治的手段としての同郷団体

郷里の日本返還がなされた後に奄美出身者の間で浮上した次の問題は、関西地方と奄美諸島を結ぶ交通網の未整備であった。そこで、神戸沖洲会の有志によって奄美大島航路促進対策協議会が結成され、海運会社や運輸省、それに兵庫県選出の衆議院議員などへの陳情を行なわれている。この協議会が結成された1954年6月には

奄美諸島復興特別措置法が制定されたこともあり、翌年に神戸と奄美諸島を結ぶ定期航路が関西汽船によって開設された（神戸沖洲会 1989a）。その後もたびたび、神戸の奄美出身者の間で奄美航路に関する問題は様々な形で表出した。例えば、多くの便が定刻通りに運行されないことや神戸港中突堤の奄美航路待合所の整備状況に対する不満、新型船導入によるスピードアップや増便の要望などが多くの奄美出身者から叫ばれた⁴。こうした問題への対応のために、奄美出身者の集合的な意思表示の手段として用いられたのが同郷団体であった。

初めのうちは奄美大島航路促進対策協議会の例のように、神戸沖洲会を中心となって各方面への要望や陳情を行なっていた⁵。だが、より効果的な運動を展開するために、神戸沖洲会は神戸奄美会にも呼応した活動を働きかけ、1969年には大阪を拠点とする関西奄美会も参加しての奄美航路改善運動促進会が、同年の神戸奄美会の新年会にあわせて開かれた。ここには当時の自治政務次官や鹿児島県選出衆議院議員も出席している。この会合を足がかりに、奄美航路対策近畿協議会が京阪神の同郷団体代表者19人によって同年3月に神戸市内で結成され、航路改善運動の活動母体として、主に海運会社や行政との折衝を行なっていった。その結果、神戸港の待合所が改築されるなど一部の要望は受け入れられ、一定の成果を得るに至っている。

これらの奄美航路改善運動が盛んに行なわれたのは1960年代であるが、この時期は複数の奄美出身者が選挙を通じて、兵庫県や神戸市の市会議員となる例がみられる時期でもある。彼らには奄美出身者と行政とのパイプ役が期待されており、選挙が近づくと神戸奄美会が奄美出身の候補者の激励会を開いたり、神戸沖洲会が支部長会において党派に関わらず同会会員の候補者を推薦することを決めたりしている⁶。また、神戸沖洲会関係者が議員となる例も少なくなく、航路改善運動が神戸沖洲会から活発に行なわれたこととも無関係ではない。

同郷出身の地方政治家と同郷団体との関係は、1989年に奄美航路の発着場が神戸港中突堤から六甲アイランドへ移されることに対する反対運動でもみられ、当時神戸市議を務めていた2人の奄美出身者がこの運動に携わっている⁷。しかし、現在ではたとえ同郷者であったとしても、同郷団体が表立って特定の政治家を推薦したり、支持を表明したりすることはない。これは会の親睦活動を行なう上で、政治的な主張が会の分裂を招く危険性を避けるためである。かつて1950年代には実際に、神戸沖洲会会員から同一の選挙区（葺合区）に2名の市議候補者が登録し、その支持を巡って会の内部で分裂が起こったことがあった。その際には、神戸沖洲会と同会の主要な成員である婦人部が対立し、神戸沖洲会とは別に沖洲主婦の会と称して活動

をしている時期もあったという（神戸沖洲会 1989a）。

今日でも、同郷出身者以外も含めて神戸を選挙区として活動する政治家が、同郷団体の行事に来賓として出席することはある。だが、特定の政治家の後援会長を任じていたものが、同郷団体の役員になるにあたって後援会長を辞任する場合があるなど、政治活動と同郷団体の活動との間には一線を引くことが暗黙の了解となっている⁸。

（2）現在の同郷団体活動

以上の経緯から、第2次世界大戦後の状況を捉える上で最も特徴的なのは、「復帰運動」をピークとする政治的手段としての同郷団体から親睦を第一の目的とした同郷団体への機能のシフトである。神戸における奄美出身者の同郷団体はそれぞれに会則を定め、それに従って会の運営や行事の開催を行なっている。ほとんどの会が定期的に年次総会を開いて、役員の改選や事務的な決算報告などを行なっており、会員による演芸大会を総会と兼ねて催している団体も多い。

とりわけ、複数の先行研究⁹も触れているように、奄美出身者の団体が行なう活動の中で最も特徴的で大々的なものが運動会である。運動会は戦前期から行なわれており（中西 2007）、一度に多くの人数を動員できることから戦後も主要な行事として複数の各同郷団体によって開催されている。運動会では、神戸沖洲会は傘下の校区分ごと、神戸亀津会は出身字ごとというように、出身地区ごとの対抗戦形式が採用されている。また、神戸亀津会では尼崎市在住の会員が1つの組として参加し、他の小字単位の組と同等に扱われている。

各団体の運動会では、会員世帯に対して家族全体での参加が奨励されている。また、運動会の会場で年会費を集める団体も存在し、いずれの会でも幼児や小学生を対象にした徒競争や「お菓子さがし」等といったプログラムが、その対象者の親世代も含めた若年層の参加を促進する目的で企画されている。そのほか、神戸沖洲会では、「やらぶ」と呼ばれるソテツの実を遠くからバケツに向けて投げ入れた数を競う競技も実施される。

さらに、各同郷団体では高齢の会員を対象とした行事も盛んに行なわれている。例えば、神戸亀津会や神戸神校会などでは、毎年1月に新年会を兼ね、還暦以上の年男・年女に該当する会員や、米寿にあたる88歳以上の会員を招待して「合同歳の祝い」が開かれている。神戸沖洲会においては、毎年敬老の日に開催される同会敬

老会のみならず、傘下の校区会と支部も毎年 1 回、各自で敬老会を総会も兼ねて行なっている¹⁰。これら高齢者を対象とする諸行事は「敬老」が主だった名目であるが、同時に敬老者として祝われる会員の家族に対して、各団体の行事に参加する機会を与えるという目的も含まれており、以後の若い世代による積極的な会への関与が期待されている。

また、若年層の参加が期待される行事として、神戸沖洲会は毎年 7 月のバーボール大会、8 月のボウリング大会を開催している。これらは同会青年部とその指導的役割を有する青年部育成部とが企画や運営に携わっている¹¹。バーボール大会は青年男子と青年女子、それに壮年に分かれ、それぞれに校区別対抗形式で競われるが、青年男女の競技が主として扱われている。校区会によっては、大会前に集まって合同練習をするところもあり、若年の会員の中にはこの行事を通して新たな知己を得ることもあるという。

また、神戸沖洲会の行事では、運動会に比べて参加者の年齢が低いのが特徴である。一方のボウリング大会は、会員が親子連れで参加することを期待して開催されるもので、より年齢層の低い小中学生の参加者が頗著である。神戸市内のボウリング場のフロアを 1 つ借り切って行なわれるこの大会は青年部の育成の目的もあり、主体的に青年部が運営に関わっている。こうした活動は神戸沖洲会以外では余りみられない催しであるが、いわゆる 2 世や 3 世など若年層の会への参加をいかに獲得するかという問題は、今日の各同郷団体にとって最も重要な課題であるといつても過言ではない。

このほか、近年の同郷団体の活動としては、神戸徳之島連合会と神戸奄美会が会の創立から節目の年に行なったソテツの記念植樹と記念碑の建立もみられた。植樹に際しては、いずれもソテツの雌株と雄株がそれぞれ左右に對で植えられ、実施した団体を明記した記念碑が中央に建てられている。このうち、神戸徳之島連合会による記念植樹は 2004 年に須磨海浜公園（須磨区）の「多目的広場」に隣接する場所で行なわれた。ソテツの雌株と雄株とともに建てられた碑には、「記念植樹 奄美群島復帰五十周年 神戸徳之島連合会創立三十周年 平成十六年五月吉日 神戸徳之島連合会」と書かれている。当地は同会が長年にわたり運動会会場として利用してきた場所であり、同会の活動の「記憶」について奄美をシンボリックに表す植物で示したものとなっている。

一方で、より大きなスケール出身地を包含する神戸奄美会は、神戸徳之島連合会と同時期に、神戸港中突堤と神戸空港においてソテツの記念植樹と記念碑の建立を

行なっている。そのうち、神戸港中突堤の記念植樹と記念碑は同会の創立 75 周年を記念して、かつて奄美航路の終起点であった当地において 2005 年 4 月 29 日付けで設置された（図 1）。記念碑の正面には、「奄美本島、喜界、徳之島、沖永良部、与論各島より本州への船上から第一歩の地、神戸港中突堤 阪神淡路大震災 10 年」と碑文が刻まれており、神戸における奄美出身者にとっての当地のシンボリックな意味が示されるとともに、阪神・淡路大震災の「記憶」との関連も示唆されている。

また、翌 2006 年にも神戸奄美会は神戸空港において記念碑を建立しており、こちらは「神戸空港開港記念 2006 年 2 月吉日」という碑文が記されている。加えて、注目すべきこととして、この記念碑に示されている建立者名には神戸奄美会とともに「徳之島航空路対策協議会」が筆頭で名を連ねている。これは神戸空港が開港して以降、神戸徳之島連合会の関係者を中心に神戸空港と徳之島空港との定期直行便の新設を目指す運動が展開されており、その関係者有志によってこの記念碑が企画、設置されたという経緯によるものである。一連の運動はかつての航路改善運動にも通じる運動であり、採算性の観点から徳之島との定期直行便の実現は極めて厳しいと考えられるものの、2010 年に神戸空港と鹿児島空港を結ぶ定期便が就航し、鹿児島空港を経由した乗り継ぎによって奄美各島へ向かう航空路での移動が可能となつた。

さらに、植樹ではないが、沖永良部島出身者の集住地区に位置する JR 瀬駅前において、神戸沖洲会が行なっている沖永良部島特産であるエラブユリと呼ばれるテッポウユリの植え付けも主な活動として挙げられる。これは同会が地域交流活動の一環として実施しているもので、2006 年以降、毎年 10 月頃に球根の植え付け作業をするとともに、花壇全般の維持管理を行なうというものである。エラブユリは毎年 6 月頃に満開となり、同駅周辺において沖永良部島をイメージさせるシンボリックな機能を果たしている。また、2018 年には同様に同島出身者の集住地区に近接する神戸市立王子スポーツセンターからの提案により、同センター正面の花壇を「えらぶ花壇」と名付けてエラブユリを植え付ける活動も始められた。

このように、各団体の開催する行事や活動は会員同士の親睦を主目的とする傾向が強い。政治的手段として組織的実践については、一部で前述の「徳之島航空路対策協議会」といった事例はみられるものの、この団体も実質的な活動は植樹以外にほとんど認められず、かつての「復帰運動」や奄美航路改善運動のような同郷団体の政治的な要素はかなり薄らぎつつある。一方で、植樹や記念碑の設置など出身地を想起させるようなシンボリックな実践が、近年顕著にみられるようになってきた。



図1 神戸港中突堤の神戸奄美会創立75周年記念碑

(2018年12月28日、筆者撮影)

4. 神戸沖洲会館と神戸奄美会館

神戸における奄美出身者の同郷団体活動を考える上で忘れてはならないのが、神戸市内に2つある「会館」と呼ばれる拠点施設の存在である。1つは1951年に建設された神戸沖洲会館（同市中央区）であり、もう一方は1993年に建設された神戸奄美会館（同市长田区）である。奄美出身者の同郷団体は東京や大阪をはじめ、三大都市圏の諸都市や鹿児島市などにも少なからず存在しているが、拠点となる自前の施設を有しているのは神戸の同郷団体のみである。本章では、これら2つの会館の建設に関する経緯と現在の活動について明らかにしていく。

(1) 拠点施設の建設と出身地からの支援

神戸沖洲会館は沖永良部出身者のみの同郷団体が建設した国内唯一の会館である。1951年、同市葺合区¹²宮本通に建設されて以降、この会館は神戸における神戸沖洲会のみならず奄美出身者の活動拠点として、「復帰運動」が展開されていた時期から会議や集会などで利用してきた。奄美諸島の日本返還後は沖永良部島からの来神者が増えたこともあり、各支部が開催する敬老会などの行事で利用する上で会館の広さが不充分との声が上がったため、たびたび拡張工事がなされている。また建設以来、神戸沖洲会館は法的には個人名義の所有であったが、1963年に財団法人神戸

沖洲会館として法人資格を取得し、現在に至るまで神戸沖洲会と一体化した活動を行ないながらも独立採算で運営されている。

法人化を契機に、バラック建てであった会館は鉄骨造に改築されることとなった。それまでは神戸沖洲会の会員の寄付によって会館の建設費や改築費は賄われていたが、この際には各校区会に対して拠出が割り当てられた建設協力金の他に、沖永良部島在住者や国内の同郷者にも寄付金が募られた¹³。その結果、和泊、知名両町在住の有志をはじめ、阪神地区の奄美出身者、それに東京沖洲会や鹿児島沖洲会など他地区在住の沖永良部出身者から多くの寄付が集まった。最終的には 200 万円余り¹⁴が神戸沖洲会関係者以外の協力で得られ、1964 年に新会館が竣工している。

1993 年にも神戸沖洲会館は新改築されたが、この時には神戸沖洲会の役員でもある財団法人神戸沖洲会館幹部によって、和泊、知名両町長との直接折衝を経て、合計 3,000 万円近くの支援が両町からなされた（神戸沖洲会館建設 10 周年記念誌編集委員会 2003）。神戸沖洲会館の改築時においては、このような地域を越えた同郷者ネットワークを活用した資金協力を神戸沖洲会は獲得してきたのである。こうして新改築された神戸沖洲会館は、完成の 2 年後に発生した阪神・淡路大震災において避難所としての機能を果たし、神戸沖洲会員のみならず近隣の地域住民にも利用されている¹⁵。

同様のネットワークに基づく資金獲得は、神戸奄美会館（旧・神戸奄美むつみセンター）の建設の際に認められた。同会館建設の計画は当初、神戸徳之島三町連合会（現・神戸徳之島連合会）の中から「徳之島会館」の建設構想として持ち上がったのが始まりであった。だが、大島本島出身者の間から徳之島に限定せず、奄美全島の出身者を巻き込んだ「奄美会館」として建設すべきとの声が上がり、1987 年に神戸奄美会館建設募金委員会が設立され、同年 5 月に会館建設促進総決起大会が開催される形で、計画は具体的に実行されていった（神戸奄美会館建設委員会 1994；神戸奄美会 2002）。活動の中心は主に徳之島と大島本島の出身者で、他の島出身者も募金委員会には関わりつつも、実際に諸々の活動に常時携わるために結成された建設募金実行委員会に、沖永良部出身者と与論島出身者は名を連ねていなかった。ただし、募金自体には神戸沖洲会も、会として、または個人として協力をしている。

加えて、神戸を選挙区としている政治家との協力関係も、神戸奄美会館設立にとって重要な役割を果たした。特に、神戸市を選挙区としていた国会議員 I は、会館建設地を神戸奄美会が探している際に神戸市との間のパイプ役として関わったり、国務大臣として奄美諸島を訪問した際に神戸奄美会関係者を随伴させ、自身も当地の

自治体に資金協力を働きかけたりするなどしている。Iと神戸在住の奄美出身者との関わりは比較的古く、1970年前後には「神戸徳洲有志I後援会」や「神戸沖洲同志I後援会」が活動していた¹⁶。他にも後援会を通じて資金協力をした政治家も存在した。

こうして、奄美出身議員以外の政治家へのロビー活動も行ないながら、神戸奄美会館建設に対する協力要請が各方面で展開され、結局は合わせて約2,000万円の協力資金が奄美諸島の全自治体から拠出された。これに神戸在住の奄美出身者と他地域在住の奄美出身者、それに奄美諸島在住者からの計5,000万円を越える寄付金によって、神戸奄美会館は神戸奄美むつみセンターという名称の会館が神戸市長田区若松町において1993年に完成した。

しかしながら、1995年に発生した阪神・淡路大震災に伴う火災によって、神戸奄美むつみセンターは甚大な被害を受けた。幸いにも同センターは全焼を免れたこともあり、しばらくして施設の内部は使用可能な程度に修復され、被災した奄美出身者に向けてのメッセージが書かれた垂れ幕も掲げられた。一連の修復作業には、奄美出身者の中の建設会社や電気設備関連会社の経営者が、ボランティア活動として積極的に携わったという（神戸奄美会 2002）。その後、神戸市による再開発事業のもとで、神戸奄美むつみセンターは同じ神戸市長田区若松町内の新しく建設されたテナントビルの一角に移され、神戸奄美会館¹⁷に改称されて現在に至る。

（2）会館における文化活動

神戸における奄美出身者の二大拠点である神戸沖洲会館と神戸奄美会館は、同郷団体の会合のほか、様々な文化活動団体の拠点としても利用されている。表5と表6は、2018年時点で両会館を利用して活動を行なっている主な団体を示している。両会館に共通しているのは、舞踊と民謡を行なう団体が目立つ点である。また、注目すべきことに、その活動内容を「琉球舞踊」や「琉球民謡」と名乗っている例が少なくない。実際に、琉球舞踊に関わる団体によって踊られる演目は古典舞踊のほか、庶民の生活をモチーフとした雜踊りや、戦後に生み出された創作舞踊など多岐にわたる。

ここで興味深い点は、そのほとんどの団体が「琉球舞踊」と名乗っており、沖縄を含めた「琉球」にルーツを持つ舞踊として自らの舞踊を捉えている点である。その傾向は三味線を用いた民謡を行なう団体にもみることができ、活動内容を「琉

表5 神戸沖洲会館を利用する主な文化活動団体

活動内容	団体名
舞踊	松島琉球舞踊研究所(琉球舞踊)、田中教室(琉球舞踊)、カトレア会(新舞踊・親睦)、すずめの会(新舞踊・親睦)、すみれ会(新舞踊・親睦)、なごみの会(新舞踊・親睦)、グリーングループ(新舞踊・親睦)
三味線・シマ唄	山下琉球音楽研究会(琉球民謡)、川畠流島さんしる(沖永良部民謡)、沖永良部民謡愛好会(沖永良部民謡)
空手	琉道会館神戸道場(空手道)
ヒップホップダンス	大山ダンス(ヒップホップダンス)
カラオケ	沖洲カラオケクラブ(カラオケ)
老人クラブ	神戸沖洲会白百合クラブ(カラオケ、フォークダンス、書道、ふるさと民謡)

団体名の後ろの括弧内には具体的な活動内容を表示しているが、これらは原則として各団体の自称に依拠している。

資料：筆者による聞き取り調査をもとに作成。

表6 神戸奄美会館を利用する主な文化活動団体

活動内容	団体名
舞踊	松下教室(琉球舞踊)、福田美枝子琉球舞踊研究所(琉球舞踊)、幸咲会(新舞踊)、あじさいの会(新舞踊・親睦)、神戸神校会文化部(夏目踊り等)、創作エイサー神子(エイサー)
三味線・シマ唄	岩城吉成研究所(琉球民謡)、時山会(琉球民謡・奄美民謡)、ばしゃ山会(シマ唄)
着付	小谷教室(着付)
合唱	ララ・シンガーズ(女声合唱)

団体名の後ろの括弧内には具体的な活動内容を表示しているが、これらは原則として各団体の自称に依拠している。

資料：神戸奄美会館・神戸奄美会(2018)と筆者による聞き取り調査をもとに作成。

「球音楽」と名乗る団体が複数認められる。また、舞踊を行なう団体のうち、新舞踊¹⁸を行なう団体も、流行歌だけではなく奄美を扱った歌謡曲や新民謡など、いわゆる「ご当地ソング」をBGMとして創作された演目が多く採用されて演じられている。

これらの活動は、講師をプロが務めている習い事としての舞踊教室と、仲間内でサークルとして集まった親睦目的が主のものとに二分される。前者は琉球舞踊であれ、新舞踊であれ、いずれも特定の流派において指導する資格を得た講師を中心に活動がなされており、参加するメンバーは講師も含めてほとんどが奄美出身者によって占められている。対して、後者の活動も参加者の大半が奄美出身者であるが、比較的年齢層が高く、舞踊の練習のみならず、参加者が持ち寄った菓子や自家製の奄美料理を広げながら雑談を楽しむ時間も活動の多くを占めているのが特徴である。

会館を利用する文化活動団体の多くは、同郷団体と別個の団体として活動している。だが、各同郷団体の総会や敬老会に併せて開かれる演芸大会には複数の団体が頻繁に出演しており、これらの文化活動団体の出演なしでは総会や敬老会は成り立

たないというのが実情である。また、こうした同郷団体の行事における演芸プログラムは、文化活動団体にとっても日頃の成果を発表する主要な機会となっている。また、会館が主催して、会館を利用する諸団体の発表会が開催されることもあり、同郷団体と文化活動団体との関係は人的なネットワークも含めて、切っても切れない関係性にある（図2）。

さらに、舞踊経験者は合同で神戸奄美会婦人部として毎年5月に行なわれる神戸まつりのパレードに参加し、「奄美サンサン音頭」と呼ばれる新民謡に振りを付けたものを披露している。これら舞踊に関わる諸活動はほとんどが女性を主体として活動している。同様に、民謡を扱った団体も同郷団体の行事が発表の場となっていることが多く、なかにはゲストとして複数の同郷団体から出演依頼を受ける団体も存在する。

このように、神戸奄美会館や神戸沖洲会館を拠点としている団体は、多くが奄美や「琉球」のシンボリックな文化に関わる活動を行なっている。同時に、これらの文化活動は実質的に、各同郷団体の諸活動において役員の会合と並んで、重要な比重を占めるものとして認識されている。同郷団体の役員ではない奄美出身者にとって、これら文化活動団体への参加が「奄美」に関連する活動に関わる数少ない機会であり、同郷者ネットワークを形成する重要な紐帶としての側面を有するのである。

このほか、ダンス教室や着付教室なども神戸奄美会館や神戸沖洲会館で活動しているが、これらもいずれもが奄美出身者か、その縁故者によって開講されているも



図2 神戸奄美会館主催の芸能発表会で演じられる琉球舞踊
(2018年7月29日、筆者撮影)

のであり、奄美出身者のネットワークに根差して展開されている。また、文化活動団体の意味合いは同郷者間の文化的な紐帯としてだけではなく、使用料を徴収することで得られる収入が両会館の運営にとって極めて重要であることが示すように、財政的な面でも大きな意味を持っているため、各同郷団体には両会館の利用が奨励されている。神戸奄美会館で定期的に活動している神戸神校会も、そうした要請を受けて同会館を利用しており、鹿児島県指定民俗文化財の「徳之島町井之川夏目踊り」を踊ったり、茶飲み話に興じたりといった親睦目的の会合を行なっている。

5. 新たな活動の模索

しかしながら、近年では会員の高齢化などの影響によって、様々な行事を同郷団体の会員のみで開催することが困難になる団体が目立ってきてている。そのため、かつては毎年開催していた運動会や定期総会などの主要な行事でさえ、その開催を止める団体も現れている。

そうしたなか、既存の行事への参加を呼び掛けるだけではなく、実際にシンボリックな文化活動を同郷団体への若年層の関与を促進し、後継者の育成につなげようという意図をもって企画された実践もみられた。その典型例が、かつて神戸沖洲会青年部育成部が行なっていたエイサーの活動である。

エイサー自体は沖縄本島中部に由来する芸能として知られているが、奄美諸島においても 1980 年代末以降に受容され、複数の団体によって演じられている（沖縄市企画部平和文化振興課 1998：264-270）。神戸沖洲会での導入も比較的最近で、1998 年に当時の青年部が新たなイベントを企画しようとした中で発案されたことに端を発す。その頃は、すでに沖縄のエイサーが世間で広く知られるようになっており、関西でも沖縄出身者らを中心に複数のエイサー団体が活動していた。さらに、沖永良部島内唯一の高校である鹿児島県立沖永良部高等学校がエイサーを課外活動として取り入れ¹⁹、新たにエイサー部が創部されるなど盛んな活動が注目されるようになった。こうした背景をもとに、神戸沖洲会青年部の有志数人によって新たな文化的実践として始められたのが同会で最初のエイサー活動である。

エイサーの指導は神戸沖洲会館を拠点としている琉球舞踊教室の講師に依頼され、未経験者である青年部メンバーに踊れるように振り付けが創作された。だが、その後に青年部の強化のため創設された青年部育成部と指導にあたっていた講師との間で齟齬をきたし、一時的にエイサー活動は休止することとなる。対立を招いた要因

は、神戸沖洲会の後継者育成を目的により幅広い若年層の参加を目指す青年部育成部と、技術的な上達と完成度の高いパフォーマンスのために少数先鋭を志向する講師との方向性の違いであった。

しかしながら、しばらくして沖永良部高校卒業生のエイサー経験者が神戸沖洲会青年部の役員に就き、指導にあたることによってエイサー活動は再開される。以降、同会でのエイサーは会の後継者育成と活性化に重きを置きながら、運動会をはじめとする各行事で演じられるようになった。また、神戸沖洲会館の近くに立地する神戸市立上筒井中学校において、沖永良部島出身者のエイサーが運動会で演じる演目には地元にゆかりの「伝統芸能」として採用され、神戸沖洲会の青年部員が同校へ赴いてエイサーの振り付け指導を行なうという例も見られた。奄美出身者が同郷団体への若年層の動員を企図して再構築した文化が、集住地区の独自な文化として、ホスト社会の側に捉えられた興味深い事例ということができる。

一連の育成部による活動は、実際にこのエイサー活動を通じた個人的なネットワークが、神戸沖洲会の青年部活動の人的なコアの一部を形成するに至った。そのため、継続した文化活動としての存続を求める声もあったものの、当初の目的を達成したということなどの理由から、現在では活動を休止している。

だが、同会とエイサーとの関係は、前述の沖永良部高等学校エイサー部との交流という形で継続されている。例えば、2018年8月に長野県で開催された「全国高等学校総合文化祭」の「郷土芸能部門」に同部が出場した際、会場での応援に神戸沖洲会会員が駆けつけるとともに、大会終了後に同部の部員を神戸沖洲会館に招待しての歓迎会が開催された。8月10日に開かれたこの歓迎会には、同校の卒業生をはじめとする神戸沖洲会関係者が参加し、大会での演技のビデオ上映や神戸沖洲会館でのエイサー披露などが催された。

また、歓迎会の翌日には神戸沖洲会館に隣接する神戸市立宮本小学校にて、地域住民や同小学校関係者を招いての交流会が神戸沖洲会の仲介で開かれた。そこでは、演技披露のほか、同校エイサー部員による小学生に向けての演技指導なども行なわれ、シンボリックな文化活動を通じた地域社会との交流を積極的に進める実践が繰り広げられた²⁰。

一方で、奄美出身者全体を包含する神戸奄美会と関係の強い神戸奄美会館も、近年は地域社会との交流を目指した新たな試みを行なっている。その例は2015年から毎年1回、神戸奄美会館に程近い同市長田区の若松公園で開催されている物産展である。この催しでは、原則として週末の2日間にわたって、神戸奄美会関係者を中心とした出店者が、奄美の特産品や文化情報を発信する機会となる。

心に各島も特産品の展示即売会が行なわれるとともに、会場の特設ステージで奄美出身者による演芸プログラムが披露されている。

当初は、人口減少や高齢化が急速に進む出身地・奄美の状況を受けて、その特産品を神戸においてPRすることが目的として企画されていた。出展者は神戸奄美会傘下の同郷団体のほか、奄美出身者によって設立された奄美の特産品の流通・販売やイベント企画などを手掛ける一般財団法人などが名を連ねている。なお、物産展自体は神戸奄美会が主催者で、同会の役員を中心とする実行委員会によって企画・運営がなされていた。また、特設ステージでの演芸プログラムでは、神戸奄美会傘下の同郷団体や神戸奄美会利用団体などが出演し、同郷団体の総会などで演じられるのと同様に、三味線を用いた民謡の演奏や、歌謡曲に合わせて踊られる新舞踊などの演目が披露されている。

この物産展は第1回目の開催以来、毎回同じ形式で行われてきたが、2018年の第4回目を開催する際に大きな方針転換がなされた。それは、実質的なイベントの企画・運営は従来通り神戸奄美会役員を核とする実行委員会が行なうものの、主催者を神戸奄美会から「アスタ新長田北テナント会」に変更するというものである。「アスタ新長田北テナント会」とは、阪神・淡路大震災後の「新長田駅南地区震災復興第二種市街地再開発事業」で建てられた再開発ビルのテナントによる連合組織のことであり、神戸奄美会と神戸奄美会館はその一員として主催するという形式が採られたのである。

これに伴い、これまで奄美に関連する団体のみが出演していた点を改め、神戸奄美会館周辺に所在する自営業者なども参加するようになった。この背景には、神戸奄美会、およびその活動拠点である神戸奄美会館の活動を、神戸市の長田地区の地域社会のなかの一員として位置づけようという同会や同会館の意向があった。そして、そうすることによって同会や同会館の活動に対する理解や関心を高めるとともに、行事開催に関わる財政的、人的負担の軽減を目指すという思惑があった。

実際に、2018年10月27日と翌28日の2日間に開催された4回目の物産展は「第4回奄美群島地域振興展」と銘打たれ、神戸沖洲会、神戸亀津会、神戸神校会といった神戸奄美会傘下の同郷団体に加えて、一般社団法人「結いの島」や一般社団法人「徳之島」といった奄美的物産販売を手がける法人、京阪神地区で営業する奄美料理店、そして奄美出身者とは直接的に関係のない長田区内の鶏卵専門店やゲームセンターなどが出展し、販売ブースを設けていた。

同時に特設ステージで催された演芸プログラムでは、神戸奄美会館の利用団体を

中心に、奄美出身者の関わる舞踊や民謡演奏、さらには奄美出身者の歌手による歌謡ショーなどが行われた。また、徳之島の「井之川夏目踊り」や会の最後を盛り上げる「六調」と呼ばれる手踊りが会場の見物客を巻き込んで行われるなど、同郷団体の総会や運動会でみられるような光景も繰り広げられたが、ここでもあくまで来場した近隣の地域住民に対して奄美の「文化」を紹介するという形式で行われた。

6. おわりに

ホスト社会から受けた偏見や他者化の経験は、奄美出身者にとっての極めて重要な外的要因として「本土」または神戸への同化を志向させた。その延長線上に「本土復帰」を目指す「復帰運動」をみることができる。だが、復帰運動の目的が達成された奄美返還後、同郷団体は政治的な目的を前面に押し出すような活動を展開することではなく、むしろ同郷者間の分裂を招きかねない政治活動は意図的に避けるべきものとして認識されている。そのため、復帰運動を主導する団体の流れを受けた奄美出身者の同郷団体であるが、以上の事例から明らかなように、奄美の返還後は主として「親睦」をうたった活動にシフトしていった。

今日では多くの同郷団体にとって、いかに若年層をはじめとする同郷者を団体に関わらせるかが最も大きな課題となっており、象徴的な文化イメージが利用されているのは、その対応策の 1 つである。こうした場面では、かつて奄美出身者の間で否定的に捉えられることもあった「奄美」という文化的なカテゴリーが肯定的に、アピールすべきものとして扱われている。また、1990 年頃からの沖縄ブームを背景に、奄美出身者の自己表象として沖縄イメージの流用がなされている点も特徴的である。これは「復帰運動」では否定された「沖縄」や「琉球」との文化的類似性が、むしろ肯定的なものとして強調されているのである。

「本土」の奄美出身者によって再構築された奄美のシンボリックな文化が果たしている役割は、若年層への勧誘効果だけではない。高齢の同郷者にとって、会館を中心に活動する舞踊や民謡の教室、さらには同郷団体の開催する行事への参加は、同郷者と方言で会話をしあえる時間を提供し、貴重なロコモの情報交換を行なえる交流の場として機能している。加えて、舞踊や民謡の教室に参加する奄美出身者の多くは、阪神大都市圏への移住後にそれらの芸能を習い始めた人々が多く、教室の発表の舞台として同郷団体の総会などに出演したことを契機として同郷団体の活動に関わり、役員を務める様になった例は非常に多い。このように、様々な文化活動

が同郷団体活動の中心的な項目として用いられており、娯楽として再構築されたホームとしての「ふるさと」の文化が、演者の側にも、また演者の親族や友人である観衆としての同郷者の側にも、深く浸透している。

琉球舞踊やエイサーなどの例が示すように、「沖縄」イメージの流用や奄美も含めた「琉球」イメージの利用を通して、神戸在住奄美出身者の手によって再構築されたこれらの文化は、奄美出身者のネットワークやアイデンティティを語る上で等閑視できないものとなっている。つまり、郷里のシンボリックな文化としての意味が付与され、同郷者ネットワークの形成にも用いていられているのである。そこでは、奄美出身者としての肯定的なアイデンティティの形成も期待されているのである。

また、会館を拠点として同郷者によって活動している団体には習字やカラオケなど、決して「奄美」や「琉球」を表象するシンボリックな活動だけを行なっているのではない団体も含まれている。しかし、同郷者間の親睦を目的とし、同郷団体との関係性を持って活動しているということにより、違和感なく同郷団体活動の1つとして認識されている。その結果、縁故就職や住宅の提供といった相互扶助に依拠できない時代において、同郷者が関わる多様で多数の文化活動団体を束ねる結節点として会館があり、それらが一堂に会する機会として同郷団体の行事があると言つても過言ではない。換言すれば、多数ある文化活動団体のメンバーになっているという関係性が、現在では同郷団体を核とした同郷者ネットワークの重要な紐帶となっているのである。

さらに、近年の同郷団体は同郷者間の親睦を深めるという機能に加えて、移住地における地域社会への参加を志向する傾向を強めている。この背景には、前述したように従来からの課題となってきた同郷団体への参加者の減少と高齢化がある。かつて主に工場労働力として吸引されることに付随した連鎖移住によって、多くの奄美出身者が神戸に移り、定着していった。しかし、脱工業化が進展することによって農山漁村から大都市圏への人口移動の様相は大きく変化し、工業都市としての神戸へ奄美から移住する人々は、若年層を中心に激減することとなる。こうした状況下における適応として、出身地とともに移住地・神戸を「ホーム」と捉えつつなされる諸実践は、近年の新たな活動の傾向として捉えることができよう。

〔付記〕本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（若手研究）「脱工業化にともなう都市マイノリティ層のコミュニティ変容に関する地理学的研究」（研究代表者・中西雄二、研究課題番号・18K12584）の助成を受けた研究成果の一部である。

参考文献

- 鰯坂学 2009. 『都市移住者の社会学的研究—『都市同郷団体の研究』増補改題』法律文化社.
- 沖縄市企画部平和文化振興課編 1998. 『エイサー360°—歴史と現在』沖縄全島エイサーまつり実行委員会.
- 神田孝治 2004. 昭和初期の和歌山市における郷土芸術運動の変容と郷土概念の変奏. 人文地理 56 : 59-76.
- グレイザー, N., モイニハン, D., 阿部齊・飯野正子訳, 1986. 『人種のるつぼを越えて—多民族社会アメリカ』南雲堂. Glazer, N. and Moynihan, D. 1963. *Beyond the melting pot: the Negroes, Puerto Ricans, Jews, Italians, and Irish of New York City*. Cambridge : Harvard University Press.
- 神戸奄美会編 2000. 『神戸奄美会創立 70 周年記念祝賀総会』神戸奄美会.
- 神戸奄美会編 2003. 『有限責任中間法人「神戸奄美会館」沿革史』神戸奄美会.
- 神戸奄美会館・神戸奄美会編 2018. 『一般社団法人神戸奄美会館設立 25 周年記念誌 奄美はひとつ』神戸奄美会館・神戸奄美会.
- 神戸奄美会館建設委員会編 1994. 『神戸奄美会館竣工神戸奄美むつみセンター誕生記念誌』神戸奄美会館建設委員会.
- 神戸沖洲会編 1989a. 『神戸沖洲会創立 65 周年記念誌 財団法人神戸沖洲会館設立 25 周年記念誌（歴史編）』神戸沖洲会.
- 神戸沖洲会編 1989b. 『神戸沖洲会創立 65 周年記念誌 財団法人神戸沖洲会館設立 25 周年記念誌（寄稿編）』神戸沖洲会.
- 神戸沖洲会館建設 10 周年記念誌編集委員会編 2003. 『神戸沖洲会館建設 10 周年記念誌 10 年のあゆみ』神戸沖洲会館.
- 神戸沖洲会記念誌編集委員会編 2006. 『神戸沖洲会創立 80 周年記念誌』神戸沖洲会.
- 神戸沖洲会創立 90 周年記念誌編集委員会編 2016. 『神戸沖洲会創立 90 周年記念誌』神戸沖洲会.
- 神戸徳洲会編 1976. 『神戸徳洲会会員名簿』神戸徳洲会.
- 小林多寿子 1986. 都市のなかの『ふるさと』—京阪神芝会の一日. 年報人間科学 7 : 17-35.
- 小林多寿子 1987. 〈都市化〉とノスタルジー—都市における奄美出身者的心性. 年報人間科学 8 : 23-40.
- 小林多寿子 1994. 合成された『ふるさと』—都市における同郷者集団. 宮本孝二・森下伸也・

- 君塚大学編『組織とネットワークの社会学』119-130. 新曜社.
- 杉浦直 1998. 文化・社会空間の生成・変容とシンボル化過程—リトル・トーキョーの観察から. 地理学評論 71 : 887-910.
- 椿真智子 1998. 多文化社会カナダにおける日系人社会の変容と文化継承—Ethnic 文化は存続するか. 東京学芸大学紀要第 3 部門社会科学 49 : 141-156.
- 中西雄二 2007. 奄美出身者の定着過程と同郷者ネットワーク—戦前期の神戸における同郷団体を事例として. 人文地理 59 : 172-187.
- 中西雄二 2016. 奄美出身者の組織化と領域的アイデンティティ—神戸における終戦から復帰運動までの事例をもとに. 文明研究 35 : 1-30.
- 西村雄郎 2006. 『阪神大都市圏における都市マイノリティ層の研究—神戸在住「奄美」出身者を中心として』社会評論社.
- 西村雄郎・国場壱子 1999. 震災と郷友会—「沖洲会」の場合. 岩崎信彦ほか編『阪神・淡路大震災の社会学 第 2 卷 避難生活の社会学』212-223. 昭和堂.
- 水内俊雄 2001. 大阪市大正区における沖縄出身者集住地区の「スラム」クリアランス. 空間・社会・地理思想 6 : 22-50.
- メリッチ, A. 著, 山之内靖・貴堂嘉之・宮崎かすみ訳 1997. 『現在に生きる遊牧民—新しい公共空間の創出に向けて』岩波書店. Melucci, A. 1989. *Nomads of the Present: Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society*. London: Hutchinson Radius.
- 中山速人 1998. 『エスニシティと社会機関—ハワイ日系人医療の形成と展開』有斐閣.
- Blunt, A. 2007. Cultural Geographies of Migration : Mobility, Transnationality and Diaspora. *Progress in Human Geography* 31 : 684-694.
- Park, R. and Burgess, E. 1923. *Introduction to the Science of Sociology*. Chicago : University of Chicago Press.
- Stern, S. and Cicala, J. 1991. *Creative Ethnicity: Symbols and Strategies of Contemporary Ethnic Life*. Logan : Utah University Press.

¹ 芦屋市以西の関西在住奄美出身者の同郷団体は、主に関西奄美会の構成団体となっている。

² 形式上、大島本島会という名称の団体が神戸奄美会の構成団体として存在するが、実質的な活動はほとんどなされていない。

³ 徳之島の集落や校区のうち、神戸を拠点とする同郷団体が存在しない地域の出身者に関し

ても同様の傾向が認められる。

⁴ 『奄美』1965年7月11日、奄美社。

⁵ 『奄美』1965年7月11日、奄美社。

⁶ (1)『奄美』1967年3月21日、奄美社。 (2)『奄美』1967年4月11日、奄美社。

⁷ この運動の結果、六甲アイランドへの移転が覆されることはなかったが、神戸奄美会や神戸と尼崎の沖洲会の会員限定で、神戸と奄美間の船舶運賃が割り引かれる制度が2017年にこの航路が休止されるまで設けられた。

⁸ 但し、京阪神地区の奄美出身地方議員らで結成された関西奄美議員連盟は、その名簿が1998年度の関西奄美会役員名簿にも記載されていたように、同郷団体との関係が密接であることを表面的にも明示している。これは同連盟が超党派で結成されており、同郷団体における政治的な対立を招くほどに特定の党派性が明瞭ではないからであると考えられる。

⁹ 例えは、小林(1986、1987)、西村(2006)など。

¹⁰ 神戸沖洲会の傘下では、9校区会、37支部が活動しており、その大半の団体が総会兼敬老会を日曜に催している。そのため、会場となる神戸沖洲会館では1年を通してほぼ毎週、参加者数の差はあるが、50人から150人程度の参加者を動員する規模の会合が開かれている。

¹¹ このほか、神戸沖洲会本部主催で毎年、成人の日前後に会員世帯の新成人を招いて開かれる「成人の集い」という行事も、若年層の同会への参加促進を狙う目的を有している。

¹² 現在の神戸市中央区。

¹³ 1964年には、同郷者に対して寄付金への協力要請のために神戸沖洲会の役員が沖永良部島や鹿児島、それに東京へ派遣されている。

¹⁴ これは総工費約1250万円の16%強にあたる。

¹⁵ 阪神・淡路大震災時の神戸沖洲会の対応については、川崎(1993)や西村・国場(1999)に詳しい。

¹⁶ 『奄美』1969年11月1日、奄美社。

¹⁷ なお、神戸奄美会館の所有と運営は、一般財団法人神戸奄美会館によってなされている。

¹⁸ 日本舞踊で用いられる所作をもとにしながら、好みの歌謡曲や民謡などに自由に振り付けを創作して踊られる舞踊。

¹⁹ 沖永良部高校でのエイサーは、1993年に同校体育祭でマスゲームの一環として採用されたのが始まりで、1996年に開かれたアトランタ五輪の公式イベントにも出演している。

²⁰ 神戸沖洲会は2011年にも同校が運動会で取り入れたエイサーに対して、衣装の貸与や演技への助言などの協力をを行っている。また、神戸沖洲会は2012年以降の体育祭を同小学校にて開催しているほか、同小学校においてエラブユリの植え付けを実施したり、入学式や卒業式に同会の役員が参列したりするなど、多岐にわたる交流を行っている。